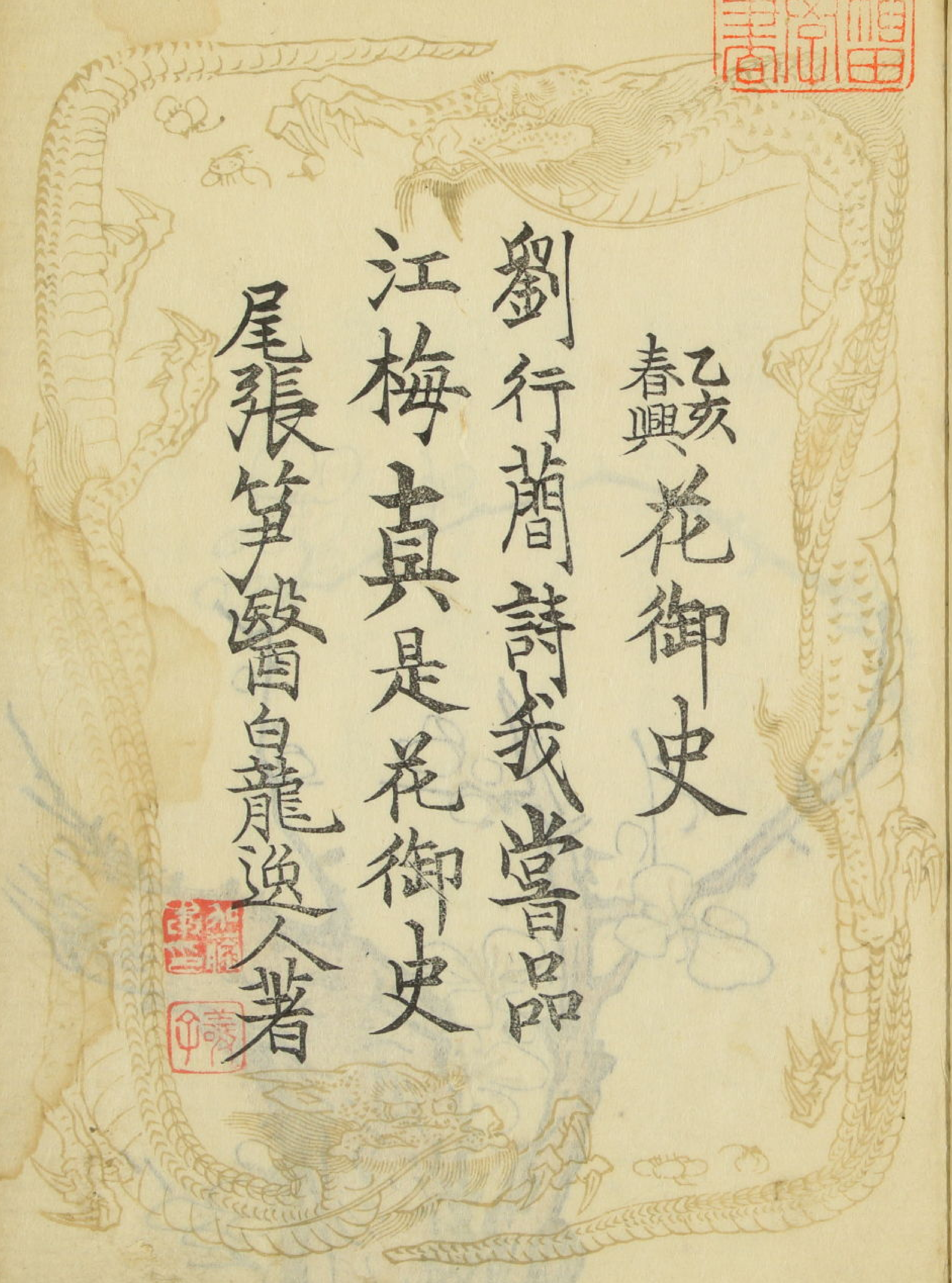
俳諧文庫　五十九

花御史

51

へ 5
1139
51



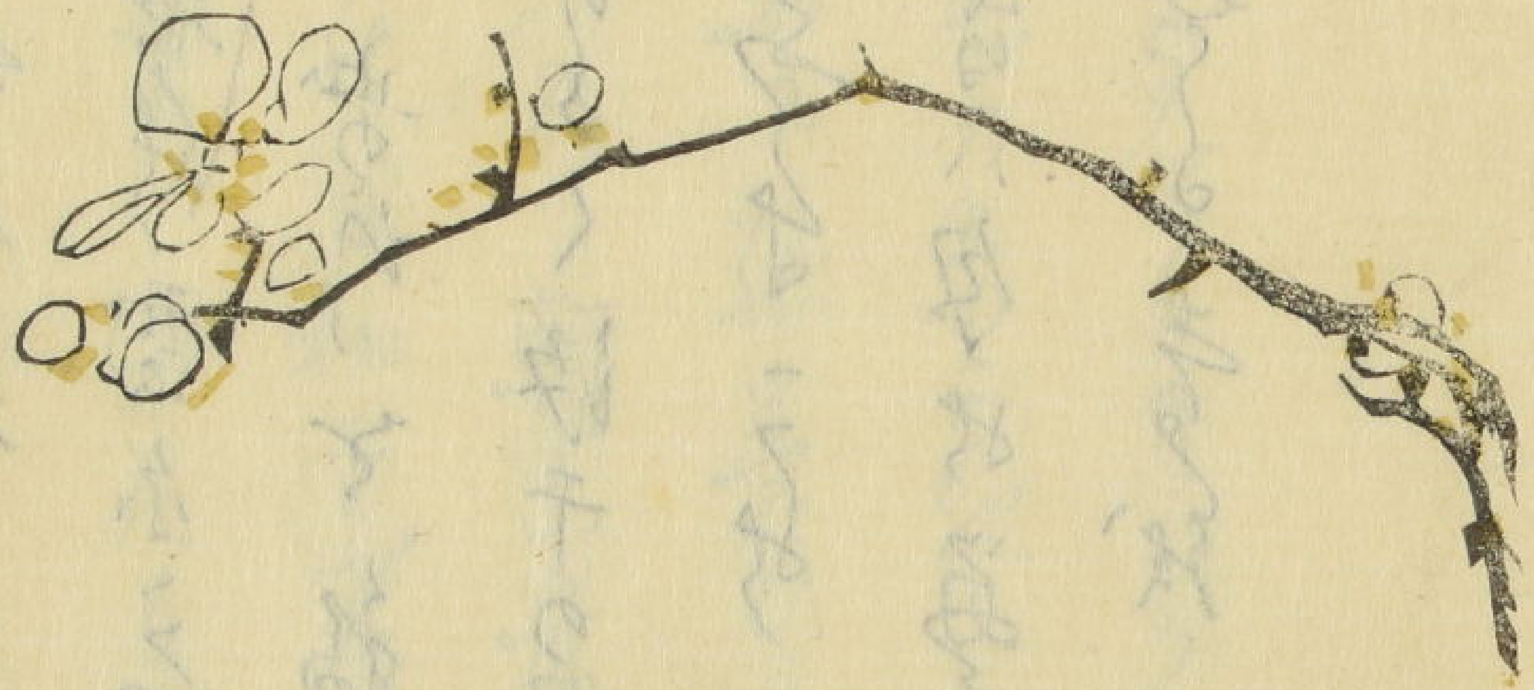
乙亥春興花御史

劉行簡詩我嘗品

江梅真是花御史

尾張笋醫白龍逸人著

へ5
1139
57



歌仙行　逸人

梅が香も雲にこもるゝ日のゆめ　橘羅

雀の歩行を擬す若草　松樹

袖にかるく汐干の貝を拾ふらん　人

家ふかくこもりに酒をみ遊す　人

黄昏ハ月も無き花に樂しみて　桃堤

紫なる青緑送る秋風　さらを

漣のよせてハ消る霧の中　羅

簑毛の末の紀坂本の人　樹

先々も孫甚ひし貴乳　人

氷柱乃軒に落る松の葉　堤

朔日も日和を暮に鳴きより　京々世

ほうて迄たる袖ま章　いきち

加茂川ハ恋に奴の帯ほとゐ　せ

豆腐肉に津まで俎板の上　世

篝目の之に白雲散る里　樹
盛久殿は勝衣の月　人
行人は雲は萩を放ぬらん　ち
舟は使をいそぐ走らせき　羅
ちりむすし満たに垢の檜箸　人
盥は雨をあける芭蕉葉　樹
目は先キは瀬の落こむ残りけて　羅
猿の子らしくは狸ふ夕暮　ち

ぬらくと気はとりけり跡暦　人
天狗にちりき山伏は彭　羅
笠古き菩薩の餅に杖行く　樹
籠に尾はくれの勝る赤鯛　人
ときん庵送りおしたる吉気　ち
あ傾城は橋詰の月　樹
切賣は西瓜哀に色白し　人
蛭蝉はのある灰汁桶　ち

椴の樹のすゑあふ枝に斧えて　樹
土もち車の油たりしあき　羅
噎に置忘れたる茶杓こゝろ　ち
此姫宮は君もうとまれ　人
八重霞嵐は初瀬ゟ三芳野ゟ　羅
春はみちたり茎漬の水　樹

家作る大君来ませ賀年に世々　秋麿
蓬莱は梅の山路を歎鴫　不轉
咲みちて風紙含めり花の粉　快臺
巣もる鳥のこゝろさし哀の字　塊翁
馬に鞍おくや柳の殺こゝ里　知多 大巣
鶯の藪く飛さむ初日新　宮 麥里

しな柳まつの残雪しかり　橘羅
梅か香や窓に啼寸鳥の聲　桃堤
うかれ家を尋さし猫の恋　呂洲
茶巣の頭巾も古しかゝの色　古覌
立合ハ柳ハ風と嫁なり　いきち
仰に別し業ともおして若菜摘　路大
鶯や鈴の紐ひく女中宿　赤毎
聲々や聲しくの明烏　大雅

根のうちに梅の咲さる宿の春　探水
春の風ハ雲ハ八重垣松大路　さくせ
古里へうかりし須ハ纔月　樵夫
梅若菜是等ハ庵の馳走哉　松樹
遠ふて来る児か
道草やこゝろまゝ行　逸人

文音 歌仙行

下総 桂丸

簑と衣を一人暮しぬ春の月 逸人

挿動かす野蛙の声 丸

塗揚し雛の住居に解搖て 丶

琴の隣に志かけたりけり 丶

漣に移して見ゆるや山乃隅 丶

夏の芽葉に露乃はつちり 丶

凪むけハ破の嵐に靴のまく 丶

兄乃使を誘る梓女 丶

夜しくハ洞に届る時雨して 丶

冬を栞に忘れる戀草 丶

鶺鴒好きのふもかうも杉に鳴き 人

拾子はちらし目覚て居る 丶

三日月ハ足の雲間に新落く 丶

落栗の音に後陣乱るゝ 丶

四輪車に引かけてや萩すゝき　、
燕の役うし油とる壷　、
茶の香のうつしかふ鼻の先　、
湯をはこむ掌は庵　、
春雨の余波を人は小田かれ　九
ゝ孫ましゝと拾ふ鶴の子　、
銭ゝ捜山の煙に夕来て　、
臼乃搗ゝ米借ふれたり　、

衣をうつ軒を水鶏の叩らん　、
葛は茶まくす為ふ好須　、
高砂の松も昔の恋ふれや　、
浪は鞁をならす世の中　、
仮初は酒ゝ命を神儒佛　、
すゝめりこゝへし試の坂　人
雲はため夕の誉はいやまさり　、
庭を吹り秋は川風　、

李白一斗詩百篇
逸人千餅發句扇

梅樹逸人画讃

白萩に下手こそあれ世話好かな、
くゝ里頭巾に太郎冠者患ひ、
不孝な者好み悪しき魚喰ふなり、
花の七日をはかなるうしれ家、
逸人か覚ゆるとはいへ咲いて、
耳こそ聴きす雨も　春の曙、

文音

歌仙行　　洛　金菜

ゑふの日尓簑着て来るや田子の貴

松尓隣し陽炎の宿　逸人

砂山にこゝまで春残惜らん　菜

きゝ分つまと驚る魚をとまる顔　人

飯釜も多く附尓ハ　磨きあり　菜

今年ハ酒に出来味のよし　人

かゝとくに来まつる秋の風　菜
硯せゝるく恋は手のうつ紀　人
饒うけを心驕りし薄羽織　菜
糸車賣は咄拙し　人
野鶏も深は五毎夢たり　菜
土は不とりのこの添早楠　人
夕身のおちりと竹をき現き　人
赤牧刈　女と遣る人影　菜

頻須は雨に取出す　紅葉鮒　菜
三刧はうり日枝に志向ふ　人
所乃憂をうほろふ花にくらん海　人
今も鄙にのこる山唄　菜
世閑さい雀の親子見守る　菜
智月句集に膝のちぎれさき　人
錆銭のさまり付たる山崩〻椽　人
志ほりに波のさしかゝる音　菜

馬士に喧嘩の尾をうちまかせ　菜
後藤は目貫光り尊き　人
日の影は横に節遠蟹ヶ厨子　人
中は夾の子は荒もしきたし　菜
栂尾は虫の住書にうつ汲あり　菜
たひふは去つぱ茶壷うつふ　人
腰骨の立かぬるほと砕律重　人
霧をこえて自は登る也　菜

海西は学は萬之咲いきき　菜
音銭入てみる高麗笛の音　人
仰はまさまり女をむ若荒ぶり　人
猫の恋する石はかくれ　菜
何家も竈賑ふ添花の春　菜
金以続ふ替薬種梅の樹　人

博浪の英名を汲ぬ春乃水

白龍逸人 并画

鶯は足もとからし山の里　伊勢 丘高

夕霞東の宮は春と成になり　宗古

うかり白し梅人に折らぬ里　百貢

春風や山のうらしそ水の上　淇石

ふらうかぞ不二見て立り春の人　燮齋

なる飛る影ある里桃の酒　白田 李東

江の上や梅明るしく星も希し　椿堂

乗捨し馬眠るゝ萱の陰 對馬 耳酔

花の風風にふかるゝハ高く蝶 戯蝶

山風や柳の下を飛ぶ燕 雨耕

賑ゝけや岨の立木ハ夕霞 箱館 布席

芽出まりて大きな若木はたり 来車

一節に水ハ流れて春の川 壹岐 一盞

吹たけの風に畳もむ春の海 誘帆

一ツ飛ぶる蝶に暮く夕日かげ 三千雄

東方曼倩

延壽盗桃
其謀乃臧

芳華園逸人画讃

寐ても見付る里の梅の声　洛 雪雄
百姓の子ともやうめの花　金菜
如月やまた育にふる身ハ雲　菅鳥
嵯峨山ハ能まくしき霞かな　菊人
是ほとか皆見ゆる田の蛙　十丈
一二反持てハ若菜の長者かな　梅價
あをむけハ花の散かむ　梅笠　白糸
野の小雨梅をかさゝう人の来る　春人

十丈か狗にかまふや梅の花　芙九
芽出て松山なれハ春の雨　杜蓼
夜桜やちんまゝ松を越てけり　素童
息災に夫婦須磨寺離子の影　蒼乱
夕ぐれハ桃も寒しハ寒き花　浪華 井眉
隣人か来て隣津守梅の花　長齋
初花や若に志むなり梅の花　星譜
数癖かひとふきてし花の内　扇暑

唇にうすき墨や絹月　松隣

菫みぬうちハ名もなき庵畠　万和

初空や鶯なかぬ者もなし　瑞馬

さひしさを庭に持たる櫻かな　米彦

若草に志めりハ昔日の出かな　公路

春の根乃夢ハ拾たりせざりけり　屋烏

躍るハ踏歌競る中も春の宇　宝門

さゝく鶏春ハ水さへ詠その　井左

年明ての宇治に歩行ハ蛙　草齋

牧野に交る西風ひや梅の茶　外海尼

夕くれに幅ゝ付たり花曇り　杉良

いふての有餘る中に櫻かな　奇調

西風に孤影を梅に刻ミたり　蜂友

鶯や下戸といはるゝ声もなし　三津人

寒晴に七日の紀を日に暮る　奇淵

、折のこし伐残しけり山さくら　江戸　完来

、堅かひに渡したるその一ッ橋　成美

、人ごゝろ種へ動けは衛り月　笠齋

、柱揺りや神垣外へ鷺の聲　可笑

、鶯や杉の向ふは酒屋かな　国村

、山吹に岩のかくれを二瀬かな　松夫

、笛の師か蘆を探ひけり春の雨　可麿

、正月や脇差くらや葵の香　竹馬

、日かくらに笠きて厂の行衛かな　穉窓

、生酔の跡あとぞ寄る柳かな　鷺雪

、散れは桜白ふいて有りぬへし　道彦

、梅の月柳にかかれは水寒し　長門　羅風

、初音やそのせいぞせるあとさき子　肥後　一壷

、花の宵に似すも森らぬ寺れの音　備前　幽雅

、梅咲くや谷戸は匂ひや炭俵　讃岐　南之

、ものゝ新種もきまれは日和哉　薩摩　琴洲

おなし夕くれ香もまさる岸の梅　大津 于當
大空に雲はれかゝり梅の月　茁堂
梅か月一本に下る枝うつり　石鹿
梅の香に行当りたる旭かな　桂良
春の戸をさしても春の月夜かな　一堂
霞む日や引出す里の流かな　宇洋
夕の月や梅に散込む夜のかな　千影
名もさまざまの咲に出たる川桜　烏頂

舞ふ胡蝶

夢の胡蝶と遊ふ覧

梅樹逸人并画

九つ乘噪て明うしぬ春の雨　河内　耒紀

夢うつゝ日の出暮て河る柳かな　宝雨

猶月雨よりよし
松の戸や風ハさらさら絲さしら屋　和泉　鷲笛

何此ため内ニハ居る鶯其の山　明石　千尋

春寒む雛ハ歯朶撰まも東の町　池田　呉老

馬の鈴よく聞ゆたる桃椿　近江　破文

梅の月真似明らず　楳日和、　呑龍

和歌の浦に招ふこゝろ花芳葉搖　遠江　起石

年毎に折ても扨あくしゆの花　丹波　武陵

鏡てある比叡の山も花の雲　五柏

山里も人も出行春の風　拾朗

鶴山や鴬のうらの遠出行　万堂

黄昏や松ハ千歳の木の葉　丹後　挑之

黒鶴ハのどかさ迄の花茎　出雲　花叔

鴬に尋たる我の舎りかな　浦安

湖の行先まで春の風　有秀

山吹や灯ら里のすゞ嵐山の雲　宇治　方成

花に七夜柳に五夜旅枕　兵庫　玉滓

芳野山雲の中より散る桜　播磨　田實

雨にさへ春の名残をしぐれかな　浪華　祇白

蘭世を捨むきむや梅の枝　長崎　擧江

老々ちに見られ梅さく山の家、　祥禾

水上ハ瀧て流るゝ春の月　尾道　藏六

織月下旬
琴弾て人の出けた夜や年のくれ　伯耆　治雪

流月下旬にすゝえしハ

鮒が荷こしらえするしぐれ哉　常陸　杢江

鶯やこのみ菜までも麿る壬生ゆかり　きび　閑齋

海見えて枝を捨けり春の山　豊後　杜由

大船のみよしにみえて長閑さ、　弗水

雉子鳴や山家の裏もみなみ霞、　仙洲

鶯が紫さへ浮れハ住まで来　南良　綏篤

流月下旬に寺えハ

ゆらしつゝ雨の煙るや、柞原　南部　谷雄

鶯ハ妻のゆくとも思はれず　行脚　北尼

、湯も我端に見えけり小笹原　三河　仙雀

雲にも春日白く影白けり　甲斐　漫々

彌月下旬に寄てハ

嵐ある影靜見たし冬の竃、　董行

子が日咲風やまこの海路山　日向　真彦

人ハいさいかに若菜も見川横　加賀　車大

ある時ハ鐘につく也田の蛙、　固来

年しくや乙女に知る白菊花の枝　若狭　雲居

春の日や鳥鳴ほくし日暮たり、　渡千里

足音のおそろしハ散さくら哉　下総 蒼峨

声もし氣も冴ら寒し鳴鶯　古彦

ひやつこき狐の面也朝出る　亀皎

有るなから十五夜むかふ花の雲　青岱

雨もよや臼の下ゆく春の茶　皎月

錦月石旬楽さえハ
若緑まるを隣も精だす年のくれ　三顧

同
鍋叩茶飯ハ出れて枚の服る　但馬 月波

同
根はつりふきまいつて縄ほどし、　三津

冰麺湯反酒のうけしや花の春　石部 亞渓

花の胴と香に呼ふけて藪の梅、　志宇

川越て我家見ゆる柳かな　彦根 素律

折て見る枝ハちかし梅の花　土山 虚白

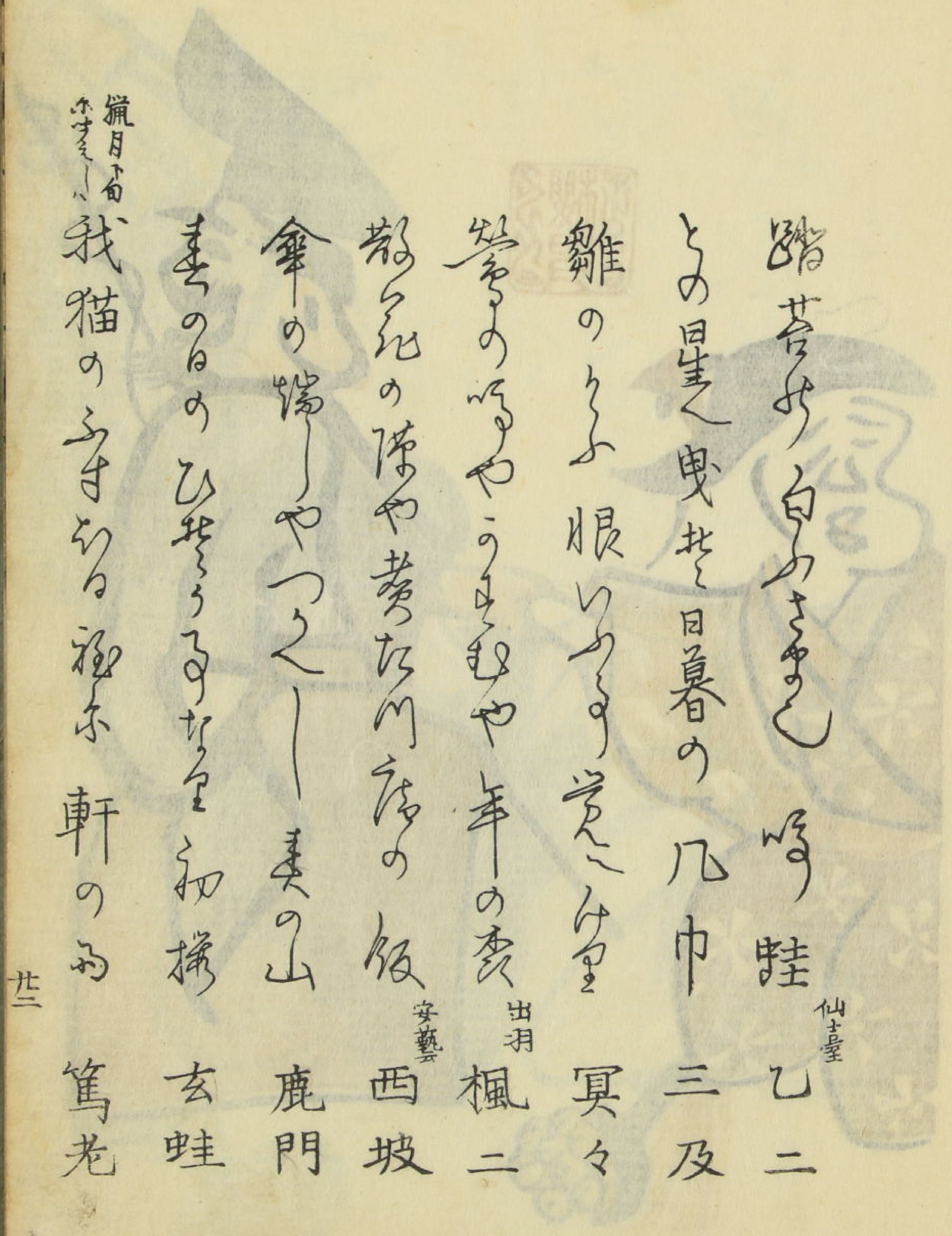
出宋に拾ふ香さへしき豐桜かな　美濃 尚摩

手なれかりして待座の道へ桜　飛騨 儲史

世の後備る墨より首ふちからか、　五芸

竹藪の枝折萌し花すみ能、　東右

雲に寐る宵はゆかし紀蛙かな　信濃 以亭
鶯やなかも初音の十五日　素檗
梅か香や河まりよられは流かくる　奥阿
萍のうきおも日夜や朧月　伯先
臘月下旬にまかえしは日
一盛り雪に碎けし奥山家　徐涯
初鳴やなかまて雪の鳴の声　三津良
寐ても聞は雨も表なり初蛙　津輕 歩牛
子鳥鳴り家や宿はや学屋　上野 碓令



踏苔や白みさまも啼蛙　仙臺 乙二
との星曳も日暮の几巾　三及
雛のうち眼いかり覚えけり　冥々
鶯の鳴やつまむや年の花　出羽 楓二
散花の陰や黄なる川原の飯　安藝 西坡
傘の端しやつゝし美の山　鹿門
春の日のひかりうらかな初桜　玄蛙
臘月下旬にまかえしは
我猫の子すなる梅に軒の雨　篤老

大和文化萬年之十二年歳
在乙亥春正月朔日

尾張外史加藤肅字敬子
思永堂逸人慢選

甲戌年中梅樹逸人所著書目録

集門部
文音親友録　秋の調　銀河集
虫の聲　初時雨　小春凪

摺物部
墨梅画　人物小摺　倚机人物
筆の世　唐紙一枚摺　冬日即事
雪此興　三百五十四番　福岳内